

聞き書きと民具から見る七島藺

平成27年度国東半島宇佐地域世界農業遺産調査研究事業 報告書

別府大学文化財研究所

はじめに

この報告書は平成27年度国東半島宇佐地域世界農業遺産調査研究事業の「聞き書きと民具から見る七島藺」の報告書である。該当地域の世界農業遺産のごく一部の要素となる七島藺であるが、全国的に見てもこの地域の中で最も特色をもつ工芸作物であり、調査を行うことにした。最盛期の七島藺産業の様子を、それを体験してこられた人たちの生の声を記録として残す意義は大きいと思われる。そのような記憶は今まさに風前の灯火であるといえる。このような調査はこれが最後になるだろう。この報告が、七島藺の興隆の一助となることを祈っている。また、この調査に協力していただいた話者の皆様と関係諸機関に深く感謝します。

凡 例

1. 本調査は、大分県による平成27年度国東半島宇佐地域世界農業遺産調査研究事業「聞き書きと民具から見る七島藺」として、別府大学文化財研究所が委託を受けて実施した。
2. 調査にあたって、調査を担当したのは別府大学文学部史学・文化財学科の段上達雄、きつき城下町資料館の細井雅希、大分市歴史資料館の内野嗣昭の3名である。
3. 調査の事務は、別府大学文化財研究所の玉川剛司が行った。
4. この調査事業を行うにあたり、くにさき七島藺振興会の支援を受けることができた。

目 次

はじめに

凡例

第一章 聞き書きから見る七島藺

(1)七島藺農家

(2)青筵問屋と仲買人

(3)畳屋

(4)織機製作所

第二章 民具から見る七島藺

(1)七島藺の栽培と調製

(2)七島表の織機

(3)イチビの栽培と調製

(4)七島表の流通

(5)『公益国産考』に見る七島藺関係民具

(6)七島藺関係民具の保存

(1)七島藺農家

①下枝芳夫さん 昭和10年4月20日生まれ 国東市武蔵町内田 【七島藺農家】

下枝氏の父の代ではすでに七島藺を栽培されていて、もっと前の代から栽培が続いていたということである。

戦時中の小学校3、4年生の頃にはクゼと呼ばれる売り物にならない七島い草履を作っていた。当時は物資も少なく、靴もくじ引きで配給されたため、児童全員に靴が行き渡らず、クゼで作った草履を履いていたようで、学校の工作の時間には草履を作り、材料がない友人にクゼを分けてあげることもあった。経済的に余裕のある家の子どもは冬になると足袋を履いてたが、自分たちは裸足に草履だったという。

武蔵地区では牛馬を農作業に使っていたようで、子牛を馬喰から買い、育った牛を馬喰に売るということを繰り返していたという。下枝家では下枝氏が中学生の頃に馬喰からサラブレッドを購入して農作業に使っていた。馬が好きだった下枝氏は学校から帰ると毎日のように馬に乗って近くの山の尾根を散歩していたのを覚えているという。中学卒業後は進学されなかったようで、高校に通ってみたい気持ちもあったが家族のことを思い、家業である農業を継いだそうである。

七島いを栽培していた当時は米5反、麦8反、七島い2反弱ほどを作っていたが、換金作物はやはり七島いであった。3月中旬に苗の準備をするため、前年に集めておいた七島いのハカマ(葉鞘)を燃料にして田んぼを焼いた。これは雑草を焼くためのもので、七島いはすぐに生えてきたという。5月頃、30cm程度に成長した苗を掘り起こし3本ほどに分けて、麦を収穫した跡に間隔をあけて植えていく。苗を植え終わると、苗の間にムッカラ(麦藁)を敷き詰めて雑草が生えてこないようにしていたという。苗の成長が悪い家があると分けてあげることもあった。また、分けてもらうのではなく、大分まで苗を買い付けに行く家もあった。

七島いは水田栽培であったが、武蔵地区は水が少ない地域であり、溜池がたよりであったため自分が思うように水を引けず、水田が乾いたら水を引き入れることを繰り返したという。

七島いの収穫は7月から始まり、お盆前までには終わらせていた。七島い栽培には一年中手が掛かるが、特に夏の暑い時期のウラキリは大変だったそうである。ウラキリは七島いの先端を鎌で切り、成長の遅い苗を育ちやすくし、ムシロを織る幅で揃えるものである。また夏には台風の影響で七島いが倒れてしまい、起こす作業が必要になった。起こすには人手がかかり、下枝家ではすべての株を起こすことはできなかったそうである。病気や害虫の対策も必要で、病気の予防にはボルドー液を噴霧器を使って撒いたが、その作業が大変であった。ポンプは手動で、七島いが大きく成長すると噴霧器の噴出口をはずして水鉄砲のようにして薬をかけていたという。

刈り取りは夜間におこなれたようで、カンテラをつけて作業していた。刈り取った七島いは田んぼに置いたままにしておき、夜明けをまって翌朝5時頃からシャリキに積み込み、干し場である浜に運んだ。このときにクゼやアカバ(赤く変色した七島藺)を選別していた。

通常、干し場はくじ引きで決まるが下枝家は浜に土地を持っていたため、その場所を干し場にしていた。浜にシャリキを引いていくのはタイヤが沈み大変な作業だったが、下枝氏の代になってからは馬に引かせるようにしたため楽になったという。

干し場ではハマカキ、モトウチ、モトヨセを使用した。ハマカキは砂浜をならすためのトンボのような道具で、幅1mほどのならす部分には10cm間隔で釘が打ってあった。モトウチは干す前に七島いのハカマ(葉鞘)を打ち付けて落とすための丸太で、砂浜に立てられていた。モトヨセは竹製の歯が4本ほどある干した七島いをかき集めるための道具である。一度に干す量は20束分ほどで、七島いが重ならないようにますっぐに干すと、天候にもよるが1、2時間で乾いたという。天日干しのあとは日陰で保管しないと色が落ちてしまう。干し場から家が近い人などは、干し終わるとそのまま浜の松林の日陰作業していたという。また家ごとに砂浜に小屋を持っていて、雨が降ると小屋に七島いを入れていたそうで、下枝さんは雨が降るたびに自転車で浜に急いだそうである。干した七島藺を砂浜からシャリキで運ぶのは牛よりも馬のほうが得意だったようで、下枝氏が砂浜で作業しているときには、他の家の人がよく馬を借りにきたという。

本格的にムシロを織り始めるのは稲刈りを終え、麦撒きも一段落した11月頃からで、遅くとも2月頃までにはすべてのムシロを織り終わったという。人手のある家ではお盆すぎからシングチ(新口)と呼ばれる、新しい七島いで作ったムシロを織っていた。シングチは値が良かったという。ワイテ(裂いて)干した七島いのことをカヤと呼んでいて、このカヤを水につけて柔らかくしてから織っていた。縦糸に使うイチビは田んぼで3、4mほどに育てていた。このイチビを一本一本皮を剥ぎ、干したものを櫛の目でワイテたものを、母がよって糸にしていた。縦糸が見えないように締めて織ると、良い値で売れたそうで、下枝家で1日に6、7枚ほどのムシロを織ったという。1束10枚で取引していて、年間の生産量は親の代には40束、下枝氏の代になってからは60束に増えたという。

販売は主に農協の共同販売に任せていたが、2束などの少数を売りたいときには武蔵や旭日の仲買人に売ることもあったそうで、どこの仲買がより高値で取引できるかなどの情報交換を近所の人たちとしていたそうである。仲買は杵築の人が来ていた。経済的に余裕のある家はムシロを貯めておいて、必要なときに売っていたようだ。1束が6千円ほどで取引されたそうである。

七島藺の売上で1年間の生活費をまかなっていたが、七島いの価格は乱高下し、生活に影響が出易かった。下枝氏は昭和38年、28歳のときに結婚された。昭和45年には家を作る資金にと73束分のムシロを貯めていたが、いざ売ろうとしたときにはムシロの値段が通常の半額である3000円ほどにまで暴落してしまい、もろに影響を受けてしまった。

下枝氏は昭和50年代のはじめまでは七島いを栽培していたが、栽培をやめてからは、農閑期だけ大神の造船所に出稼ぎに行くようになったそうである。(内野)

②矢野廣さん 昭和2年11月3日生まれ 国東市安岐町両子 【七島藺農家・仲買人】

矢野廣氏は七島いの生産と仲買の両方を経験された。最初に七島い生産についてまとめ、次に仲買についてまとめる。

七島藺の栽培

矢野氏は日出町の出身で、28歳のときに結婚されたのをきっかけに、両子で農業をして

いた奥さんの実家の仕事を手伝うようになり、七島藺を栽培された。米や麦よりも七島藺による収入のほうが多いため、七島藺生産に力を注ぎ、余力で米を生産していたという。

春のお彼岸の頃になると七島藺の苗の準備として、乾いた田んぼにムッカラ(麦わら)を撒いて火をつけたといい、5月に入ると株分けした七島いを植えて苗を育てた。両子では苗を育てるのは乾いた田んぼだが、成長した苗は水田に植えて栽培していた。七島いは倒れてしまうと商品にならず収入も減ってしまうため、倒伏防止用の網を張って守り、七島いの高さを揃えるためにウラを刈ったという。成長した七島いはムシロを織れる長さに成長したものから刈り入れて、7月から9月のお彼岸の間ですべて刈り取っていた。七島藺の畑には根元にあるハカマを落とすモトヌギの作業をするための石が置かれていて、石に七島藺を打ちつけてハカマを落としていた。落としたハカマは特に利用することはなかったという。赤く変色した七島藺は刈り入れせずによけておき、シットクゼといって物を括ったり草履を編むのに使用したという。また、ニバンゲと呼ばれる刈り取ったあとの切り株から成長した七島藺を収穫する家もあったが、これは稀なことによっぽど育ちが良かった場合のみであったという。

刈り取りが済んだ七島藺は干して乾燥させる。ワキダイ(シットウヘギ)でワク(裂く)ことによって1日で乾くようにした。浜に干しに行くには遠いため、畑を利用した。畑には茅を刈り取ったものを広げ、その上に七島藺を広げて干していた。これらの作業は刈り取り作業と平行しておこなわれるため、午前中のうちに1日で干せるだけの七島藺を刈り取り、午後からはワク作業を済ませ、翌日早朝のまだ暗いうちから干し、干す作業が一段落すると朝食を食べ、午前中の刈り取り作業に出かけてというように、1日中七島藺生産の仕事に追われていた。干す作業で1番大変なのは夕立に降られることだったそうで、雨に濡れて品質が落ちてしまわないように必死で雨が降る中で七島いを回収する作業は危険も伴ったという。ときには濡れてしまった七島藺を処分することもあった。干し終えた七島藺はまとめて2ヶ所を縛るが、これをテネるといい、テネたあとはモト(根元)だけを広げて乾燥させた。そうしないとモトは変色しやすかったという。

苗植えから刈り取りの作業は家族総出でおこなっていたが、9月頃から矢野氏は仲買人としての仕事が始まり、他の家族はムシロを織るムシロウチの作業を翌年の梅雨頃まで行ったという。織る前には七島藺を水につけることで膨らみ、柔らかくするという。ムシロウチは梅雨前に終わらせるのが理想的であった。ムシロに使用するイチビは自分たちで育てていたが、それだけでは足りなくなるのでムシロを扱う問屋や農協からも手に入れていた。ムシロは10枚を1束で数えていて、1日に2束ほどのムシロを作っていた。後述するがムシロは出来の良し悪しによって格付けがされていて、本段という品質のいいものを目指して作業していたといい、本段を作るには干す作業が重要であるため、常に天候には気をつけていた。また、ムシロバタには縦糸を締めつける機能があり、これをヤを締めるといっていたそうである。織ったムシロは軒下で広げて日光に当てて乾かす。それを延べたままシツ(湿気)がこないように蔵の2階にあげ、空気に触れにくくするために藁を敷き詰めて保管した。また鼠が来ないように注意していたそうである。また少数ではあるがムシロをブリキで囲んで保管する家もあったという。

七島藺の仲買

矢野氏が七島いの仲買を始めたのは30歳(昭和32年)のときであった。きっかけは杵築に

ある問屋で10年ほど前から仲買人をしていた実兄に誘われたためである。仲買の仕事は問屋がつける相場を把握するのが大変で、経験がない人には難しい仕事であった。矢野氏は兄の仕事を手伝う中で、独学で問屋の相場やムシロの良し悪しを学んでいったため、仲買の仕事他に家族に手伝ってもらうことは無かったという。

矢野氏が仲買を担当したのは西武蔵村で、集落全体で300軒ほどの家があり、その内の半数以上の180軒程度が七島藪を栽培していたという。買い付けにはバイクで回り、3束(30枚)のムシロを積んで帰ってきていた。今のように道が整備されておらず、バスと離合するだけでも危険だったという。昭和42年にはトラックを購入し、トラックに乗って七島藪を買い付けに行くようになった。

ムシロの相場

農家からの買い付けは自腹で、目利きができないと損をすることもある大変なものだった。自分が付けた値段より下がることもあれば、反対に値が上がることもある。仲買人を始めてから年間3000束ほどのムシロを扱ったが、矢野氏は問屋の相場をよく把握していたので、全体を通して損をすることはなかったという。ムシロの相場は1束が2千円程度というのが通り相場で、3千円を越えることは無かったようであるが、年間を通して上下しながら安定せず、年に2、3回の価格変動がおきたというが、商人が一息入れて商売を始める節季(年の初め)には元の相場に戻ったという。

七島藪の品質は色や織り方など細かいチェック項目によって格付けされた。七島藪本来の青い色がでているものは「本段」やといい、それに対して色が少し落ちているものはイロオチ、色が悪いものはイロワルと呼ばれた。本段の中でもさらに格付けがされていたほど品質が価格に反映されていて、200円の差がでるときもあったという。ムシロの織り方はより締まっているものは評価が高く、締まり具合は「段」で表された。業者によっては5番締まりなどと、〇番締まりで格付けする業者もあった。

品質だけでなく、取引する時期によっても七島藪の値段は変わったという。その年の一番最初、9、10月に織られたものをシングチ(新口)といい、値が張る。そこから年末にかけては価格が下がり気味になり2、3月にかけてまたシングチと同様の価格になるというサイクルがあったそうである。それにあわせて春先までカコイムシロ、つまり保管しておいて売る人もあったそうだが、在庫が多すぎると値が下がってしまうこともあった。一度カコイムシロの値段1束で千二百円にまで落ちたことがあったそうで、カコイムシロは経済的余裕のある家でしかできなかったそうである。また年明けの寒い時期をカコイの時期と読んだそうである。その他、前年に織った色が悪いムシロはヒネモノと呼ばれ、状態によってはそこそこの値がついたという。

買い付けてきた七島藪は、自宅の倉庫と七島藪を買い付ける得意先の家の蔵を借りて、2カ所に保管していた。それを杵築の問屋がトラックで回収にきて格付けをする。問屋による格付けをダンビキといい、このとき問屋からもらう買い付けの手数料をコウセン(口銭)といった。矢野氏が仲買の仕事のうえで気をつけていたことは、取引先の農家の信頼を得ることであった。買い付けの値段はなるべく高くし、自分の手元にはコウセンの利益だけ残ればよいという考えで働いてきたそうである。また矢野氏は買い付け以外にも自宅で作ったムシロを60束(600枚)ほど問屋に納めていた。矢野氏が取引していた問屋は一軒だけだが、杵築にはいくつかの問屋があり、中には大阪の企業も進出してきていた。大阪

の業者は地元の企業に比べると仲買人とのネットワークが少なかったようである。

仲買の仕事をやめたのは昭和57年か58年頃だったという。昭和50年からは七島藪の作付が減少していき、自然と消えていった。藪草よりも火に強い七島藪を使用する地域は、養蚕の温度管理のために炭火を使うような地域で、本州でも中部より北の群馬や栃木の周辺が多かったといい、養蚕の衰退とともに七島藪の需要も減少したのだろうとのことである。矢野氏自身は昭和64年、平成に入るまでは七島藪の栽培を続けたといい、最後のムシロは大分市内の企業に納めたという。(内野)

③大城博義さん 昭和11年2月22日生まれ 大分市津守【七島藪農家】

七島藪の栽培は、大城氏の父の代にはすでに始めていて、物心つく頃にはすでに七島藪を栽培していたそうである。家族は両親と大城氏、それに妹、弟がおり、下の兄弟たちとは5〜7歳ほど年齢が離れていたため、七島藪に関する作業は両親と大城氏で行っていた。

津守地区では七島藪は畑に植えていて、苗はタテコシ(畑立越栽培)しなかったそうである。次の年まで自分の畑に残していたものを上のほうだけ刈り取り、根を小さく株分けし、畑に鍬で溝を引き、そこに苗を植え、次の溝を引いた土を被せていった。

梅雨明けから七島藪の刈り取りとゴザ作りがはじまる。刈り取り作業は七島藪がピンと立っている朝5時からはじめ、遅くとも午前9時までには終わっていた。刈り取る量は1日に作業できるだけである。大城氏は小学生の頃から農業の手伝いをはじめ、大人たちが朝早く刈ってきた七島藪を、大人と一緒にシットウヘギをしていたという。昼から夜にかけてヘギ、次の日にシャリキに積んで河原へ干しに行った。天気の良い日は1日で乾くが、天気が悪くなかなか乾かず、しかも濡れてしまうと色が落ち、値も下がるので大変であった。またニバンガリ(二番刈り)といって一度刈り取った株から成長した七島藪を刈ることも何度かあったという。しかしイチバン(一番刈り)のほうが品質が良く、ニバンガリしたものはシットクゼといい、草履やものを運ぶホゴに活用していたそうである。シットクゼで作った草履は自分たちで使用していた。中学校に入学する頃には大城氏も刈り入れを手伝うようになったそうである。

高校は上野ヶ丘高校の夜間部に進学され、この頃にはゴザを織る仕事を覚えたそうで、織り方を教わったこともあるが、ほとんどは人の仕事を見て覚えたという。母は帰りが遅くなる大城氏を待ちながらゴザを作り、大城氏が帰宅して作業を交代すると、夕飯を作ってくれていたという。またゴザの出来不出来によって販売金額が変わるため、丁寧に織るように親からいわれことを覚えているそうである。ゴザを織るのは早い人で1日に10枚ほどだったという。ゴザの上手い下手で値が上下するため、滝尾地区では毎年ゴザの品評会を開催していたそうである。作ったゴザのほとんどは農協が集めて売っていたそうだが、津守地区の組合長が東北まで販売にいったこともあるといい、このときは大城氏の父が組合長に同行した。この時の旅費は地区の人たちで協力して出し合ったという。

七島藪栽培は大城氏が20代後半頃までおこなっていたが、結婚された28歳の時にはすでに栽培をやめていたため、奥さんは七島藪栽培についてはご存知なかった。

七島藪栽培の印象について尋ねると、大変だったのは夏の暑い時期の作業と河原で七島藪を干しているときの夕立であった。七島藪の刈り入れが始まるのは梅雨の明けた夏の時期で、背の高い七島藪に囲まれての作業は暑さはもちろん蚊にさされるし、台風がくると

七島藺が倒されてしまうため、なるべく早く刈らなければならなかった。干している七島藺は濡れてしまうと変色し、価値が下がるため、夕立がくると走って河原まで行って集めていたという。また七島藺は家族を養うための大事な換金作物であり、みんなで協力して作業をしてきたそうである。(内野)

(2) 青筵問屋と仲買人

①中村良吉さん(大正5年1月生まれ)・清末スミ子さん(大正12年4月生まれ)

杵築市大字南杵築宗近 【青表問屋】株式会社杵築西川(西川甚五郎商店)

株式会社杵築西川は、一般的に東京の青表問屋・西川甚五郎商店の支店であると思われる。しかし、資料1の明治44年の西川甚五郎商店の相場表を見る限り、本店は蚊帳を商い、近江国(滋賀県)八幡町に置いていたことがわかる。さらに明治期の西川甚五郎商店の支店は全部8支店あり、杵築と大分が青筵商、東京の3支店の内2店舗が蚊帳と畳表、1店舗が木綿と金巾、京都と大阪の各店舗では蚊帳と布団、そして岡山には備後表の仕入所として出張所を設けていた。現在は布団を中心に商っており、ふとんの西川として有名である。『豊後七島の歴史—その歴史を追って—』によれば、杵築に支店置いたのは明治20年で、これが杵築に最初に入った県外の青表問屋であった。最初は西新町に店を構え、続いて富坂に移転、そして大正12年に現在の生涯学習館のある広小路に移転した。写真1は富坂当時のものである。

多くの青表問屋同様状況が変化するのは昭和12年から徐々に戦争による統制を受けるようになってからである。杵築のみならず県内の青表問屋は昭和14年に大分県移出商業組合を設立して対応することとなった。大分県移出商業組合に属していたのは、大分、別府、亀川、日出、豊岡、安岐、国東の問屋であった。総組合長は植木文蔵氏(吉見商店)が務め、中村良吉氏(西川甚五郎商店)が事務を担当、国東地区の組合長には河野哲夫氏(河野宝策商店)がいた。この時、森久兵衛商店は組合には属していなかった。

上記の通り、話者である中村良吉氏はこの大分県移出商業組合の中で会計を担っていた西川甚五郎商店に会計担当として雇われた。良吉氏の家系はもともと青表問屋や荒物問屋を商っており、七島藺は身近な存在であった。良吉氏の祖父は青筵銀行で勤務していたそうである。また叔父の中吉氏も青筵銀行の重役でありその父である利吉氏は青表問屋をしていた。良吉氏が生まれた大正5年1月15日には既に呉服屋に転職していたそうだが、青表問屋時代の屋号はカネリであった(表1-■)。良吉氏の家は足袋や長靴など履物を扱う荒物問屋であった。良吉氏は高等小学校を卒業した14歳から商業の道に入った。しかし、昭和13年に徴兵され、昭和14年に足に手榴弾を受け負傷したため除隊となり翌年に帰郷した。帰郷直後の昭和15年、組合で会計する人物を探していた西川甚五郎商店に雇われた。

ここで西川甚五郎商店の女性事務員を勤めた、もう一人の話者を紹介したい。清水キミ子氏は大正12年4月24日に杵築市宗近で生まれた。キミ子氏は杵築女学校の第一期卒業生であり、松平賞を授与されるほどの秀才であった。その後は息つく暇なく昭和15年卒業後の二日後には満州重工業に就職し満州に渡り、事務員としてタイピングを取得した。当時の満州重工業は21人のタイプライターがおり、工場も機械化が進み、日本と比べてだいぶ

発展していたそうである。満州には3年間いたが、就職の世話をしてくれた教師の相手が重役であったため不自由のない生活であった。昭和18年20歳で帰郷する時も慌ただしく、突然に上司から日本に戻るように命じられ、いつの間にか荷物をチケットも準備されていた。帰国の名目は負傷し佐賀県で入院することになっていた24歳の兵士の付き添いであり、門司までは何の苦勞もなく戻ってこれることができた。帰郷してからは重工業からの退職金は250円があったため少しゆっくりするつもりが、10日後には西川甚五郎商店に雇われ女性事務員として働きはじめた。

青表問屋に話を戻す。昭和16年の12月6日から七島表も統制の対象となり統制時代に入った。組合の青表問屋は昭和13年頃から農協が集めたムシロと仲買人が集めたムシロを買い取る形となっていた。集荷したムシロは取引先である陸軍や炭鉱住宅に移出していた。自由に取引できない時期がおおよそ5年続き、昭和23年頃に統制が解除となった。自由な商売が可能になると昭和24・25年には組合に属していた問屋は各々で活動するようになっていった。これに伴い西川甚五郎商店も昭和25年1月に「株式会社杵築西川」を設立した（以後、杵築西川）。設立当時の杵築西川の従業員は、代表・藤井又吉、専務・熊代、事務番頭・中村良吉、仕入番頭・門実を中心に、ナカシ（見習い）3名、清水キヨ子氏を含む女性事務員4名の合計11名であった。

杵築西川でのムシロの集荷方法は、仲買人から買う方法と農協による共販の二種類があり、仲買人から購入がもっとも多く、残りは共販であった。杵築西川の仲買人は、豊岡、大神、八坂、東、杵築、武蔵、朝来、国東にそれぞれ一名ずついた。この中には、自己の資金で仲買をしていた者と杵築西川の資金で仲買をしていた者が半数ずついた。もっともムシロの品質が良い安岐には問屋が5軒あり、競争が激しく仲買人を置くことが出来なかった。一方、山香、大田、真那井、大神のムシロはあまり良い品質ではなかった。その他、直接農家が店舗に持ってきたものを購入することもあったがそれは全体の一割程度であった。共販は農協との取引なので手形取引であった。共販には24軒ほどの問屋が参加しており、もっとも購入していたのは河野宝策商店であった。続いて、吉見商店、杵築西川の順であった。当時の購入金額は一束平均2000円から3000円であった。

運搬にはトラックが必要であったため、購入は早い方であった。しかし、購入の際は周りから「金がないのに買うんか」と言われたが、「逆に金がないから家うんじゃ」と言い返し、購入を決めた。その理由は、当時集荷の連絡方法の一つである電話にあった。例えば朝一番で特急という交換方法で大田に連絡を頼んでも、一度大分から高田を経由して相手につながるため、実際に連絡が返ってくるのは夕方になるような状況だった。そのため、効率よく集荷する必要があったためトラックを購入した。

注文の受ける方法は、手紙か電報であった。朝一番に郵便局の私書箱を確認に行くのが事務員であるキミ子氏の仕事であった。多い日で10通、平均で2、3通の注文書が来ていた。取引先の多くが関東地方と東北地方であり、杵築西川の一番の得意先は高崎（群馬県）のアベセイサンであった。これらの得意先には資料2のような相場表を毎月発送していた。

杵築西川当時の相場表はないが、明治期と大正期の西川甚五郎商店時代の相場表から小印や品質の等級を知ることがきる。明治44年の西川甚五郎商店では「飛抜」「抜」「本段」「段」「別銘」「色落目方物」「一間物」「一間物色落」の順に品質を分け、これに

対応した「ヤマテ」「ヤマガタアラタメ」「ヤマガタ」「カネタ」「カネヤ」「ツジマン」「ヤマエ（一間物と一間物色落ちは同様）」の小印があった。さらにそれぞれの品質ごとに9から12の段階に分け、名勝や山や花などの印銘をあてている。これは大正5年10月7日の相場表でも同様で、一間物の品質がなくなっただけで、印銘まですべて一緒である。しかし、昭和31年の杵築西川の在庫表の分類は大きく変化していた。品質は「本段」「中色」「色落」の三種で、それぞれに「天・地・人・極・特・別・上・一・二・三・四・五・六・七・八・九」の印銘で分類されていた。杵築西川の時代、このような印銘等の墨入れを担当していたのは仕入番頭の門実氏であった。

良吉氏やキミ子氏の一日の仕事の流れは、朝8時に出勤し、キミ子氏らが回収してきた注文票を確認し、それらを帳面に写し、門実氏と良吉氏の間で相談し発送の段取りをした。一日の中で銀行には数回足を運んだ。キミ子氏は常に歩いて銀行や郵便局回りをしたことが思い出深いそうだ。一方、良吉氏は100円紙幣を銀行から数百枚単位で運んでいたことで、そのような時は銀行の裏口から入り、紙幣を紙袋に入れて自転車で持ち帰っていたとのことである。また、店舗ではムシロの他に夏には蚊帳や寝蓆を販売していた。しかし、実際に店先には物をほとんど並べておらず、女学校時代の通学路であったキミ子氏には店の中はのっぺらぼうでおじさんがいるだけの何を扱っているわからないお店という印象だったそうである。しかし、実際働いてみると店には関東からの取引先が頻繁に訪れてきており、よくお茶出しや接客をしていた。仕事はだいたい17時には終了し、親方（社長）や番頭は亀井に飲みに行っていた。

杵築西川のムシロの取り扱いは多い時で50から60万束であった。昭和25年の1月から3月までが1期、4月から昭和26年の3月までが2期とし、合計で9期行った。9期である昭和34年に本店がムシロから手を引くことが決まったため、同時に杵築西川も閉店となった。

キミ子氏は閉店する少し前の昭和31年に退職し、平成19年までタバコ屋を営んでいた。また、良吉氏はイチビを扱う商店を10年ほど開き、その後は松賀屋という呉服屋を経営した。このことから、七島表の取り扱いは昭和30年代前半には減少しはじめていたことを示唆していると同時に、イチビの需要があった昭和40年代前半までわずかばかりでも七島表の取り扱われていたことがわかる。これは以後報告する多くの青表問屋の証言と一致する。（細井）

②門 熙（73歳） 杵築市大字杵築富坂 【七島表問屋】門実商店

門実商店は話者の父門実氏が昭和34年頃から始めた問屋である（写真2）。実氏は西川甚五郎商店の社長が連れてきた近江商人で杵築支店や株式会社杵築西川では番頭を務めた人物であった。昭和34年、株式会社杵築西川が閉店する際、暖簾分けをしてもらい、西川甚五郎商店で使用していた小印などを引き継いだ。その後、富坂に店を構え、昭和45年に亡くなるまで問屋業を続けた。写真3は現在の店舗を建て替える前のもので、写真4は現在の店舗である。現在の店舗は杵築市に景観条例が出されて後に最初に作られた白壁の建物である。

話者である門熙氏は昭和17年4月2日に生まれた。青年期は理髪業を目指し、他の店に修行に出ていた。しかし、実氏が独立し、集荷のための運転や大物を扱うための手伝いが

必要となったため、昭和40年頃から問屋業の修行をはじめた。その後、昭和45年に父が亡くなったのをきっかけに店を継いだ。熙氏が七島藪を商ったのは昭和45年から昭和60年頃のおよそ15年間であった。

ムシロ（七島表）の集荷方法には直接農家から買い付ける方法と農協の共販による方法があったが、門実商店では前者が主であった。理由は共販の場合、価格設定の自由が利きにくかったためである。ムシロを買い付けする時、問屋には符牒という独特の数の数え方があった。これは、買い取り相手に実際の販売価格などが伝わらないようにするためであった。符牒には問屋同士で共通してわかるものと各店ごとでしか分からないものがあった。青表問屋で共通している符牒は「ヨ・ロ・ズ・ウ・リ・カ・イ・フ・チョウ・マタ」であり、ヨからマタまでが1から10の数字に相当する。一方、門実商店独自の符牒は「ウ・ト・シ・ヨ・リ・ナ・ヲ・サ・カ・エ・ル」であった。この場合、ウからエまでが1から10までの数字に相当し、ルは数字が続く場合に用いた。例えば、「トル」という符牒を用いた場合の数は2200を示した。

先述の通り、門実商店でのムシロの集荷は農家から直接買い付けることの方が多く、主な買い付け先は、杵築市内では北杵築地区や相原地区が多く、日出方面では大神や加貫地区の農家であった。しかし、日出方面はハタケシット（畑作栽培の七島藪）であったために上物なムシロはできなかった。

門実商店でのムシロの品質基準は、一番が色、二番が厚みであった。農家から集荷されたムシロは写真5のように検品し、同じ品質ごとに分類され、門実商店独自の青表相場（資料3）を作成した。

相場票の見方は次の通りである。相場票の小印とは「小印」と記された下に描かれているマークのことである。これらは取引先の商号を示しており、資料3の相場表は8軒分の主要な取引先への相場が記載されていることがわかる。一度取引があった業者はほとんど品物を替えることがないため、「本段」などあらかじめ前回取引のあったものと同等の物を記載する。実際、「目付品」・「本段」・「改良本段」は同じ品質で金額にほとんど差はない。あえて分けているのは門実商店と取引をしている業者がそれぞれの程度の品質のムシロを購入しているかが互いにわからないようにするための工夫である。品質にはっきりとした差がでるのは「大抜優良本段」「中色」「色落」である。「大抜優良本段」は、色、厚み、ツヤに申し分がなく最上質のものを示す。この次に来る品質が「本段」などである。そしてその下には「中色」「色落」と続く。「中色」は色が少し悪いが厚みなどはしっかりしているもので、「色落」は赤色が入って色が悪いものを示す。一方、問屋側では「大抜優良本段」「本段」「中色」「色落」が品質を分類するための基準となり、左記の通りの大分類に分けられる。さらに大分類でわけたものをより細かく分けた小分類ともいべきものが相場票の「品銘」である。特に小分類の名称は取引先やその時々によって頻繁に変わる。この「品銘」に合わせて設定された一束ごとの価格が「産地駅渡価格」の欄に記されている。そして「電畧」はムシロを電報で注文する際に使うものである。例えば「ヤマガタ本段」の「瑞穂」を注文する場合は「ウナ（急いで） ミホ 2 タム」という電報を打って使う。

相場票の左下にある「◎七島藪草」は畳表に加工せず七島藪の草そのものを販売する場合である。また「割藪」は半分に分割したもので、「丸干」は三角のままの状態の七島藪

である。そして「工事用青表」は「色落」よりもさらに品質の悪い七島表を示す。これは柔道表や災害などで急遽必要な場合に注文が入る品であった。

このような青表相場を取引き先である東北・関東・関西の間屋に送った。取引き先は左記の順番で注文が多かった。特に注文が多かった父の代では1回に300束をワム・マムと呼ばれる貨物車に積んで汐留まで発送していたが、熙氏の時には徐々に取り扱う数は少なくなっていた。熙氏によれば、七島藪が衰退した原因は、七島表が丈夫過ぎたため畳屋が嫌がったことやビニール製や安価な備後表が入ってきたこと、畳からフローリングに変わるなど生活スタイルの変化によるものだという。熙氏が最後にムシロを扱った昭和60年頃、七島藪は農家の間では「貧乏草」と呼ばれていたが実際はそれなりのお金にはなっていた。一日に4枚は織れるためおよそ2日で販売できる10枚一束ができ、一束を3000円で買い取っていた。当時でも七島藪は杵築の主要な産業として認識されており、みかんや酪農と一緒に花火大会の中でナイヤガラ花火の図柄として用いられていたそうである。

門実商店で使用されていた道具は、現在つき城下町資料館に寄贈されている。中でも小印等を書くための墨を作る巨大な摺鉢（写真6）は思い入れが深く、墨の造り方は今でもはっきりと覚えているそうである。まず、摺鉢の中にニカワが混ざった専用の墨と水を入れてふやけるまで待つ。墨は長さ20センチ、幅3センチ、厚み2センチほどの大きさで、10枚が束になっているものを荒物問屋から仕入れていた。この墨がすごい臭いだった。続いて、ふやけた墨を30分から1時間ほど摺り続けると徐々にとろみが出てくる。とろみが出てきたら墨を煮る。その後墨が少し冷めたら使用する。この墨を作るための摺鉢を使用していた当時は、摺鉢の半分以上は土に埋めて固定してある状態であった。

写真7は、毛判といい商品を出荷する際に取引き先は門実商店の商品であることを示すための印である。印の種類は表1にまとめている。

写真8は取引き先との価格である印銘を記すための極太の筆である。写真9は実際に墨入れをしている風景である。

写真10は熙氏は覚えていなかったが他の問屋ではハケと呼ばれる道具であった。これは間違えて記入してしまった印銘を消す場合に用いる道具である。馬の毛をまとめて作っており、短い方は使用して短くなっている。門実商店では自作していたそうだが、永松という下駄屋販売されていた。

写真11の木鉤は、束にしたムシロに化粧縄を締める時に使う道具である。化粧縄は写真12のように足と手を使ってきつく縛りあげるため、全く隙間がなく結べなくなってしまう。そのため、写真13のようにあらかじめ木鉤を挟み込んで縛り、結びを作る際に木鉤を90度ひねって隙間を作る。

写真14の夜鉋は、ムシロの端を切りそろえるための道具で、写真15のように使う。

写真16・17は帆前垂と法被が問屋の仕事姿である。帆前垂は前後に同じ刺繍がしてあるため汚れた場合は表裏を返して使うことが出来るようになっている。

写真18の手ぬぐいは、得意先に送るための粗品である。出荷するムシロの間に入れて、開いた時にわかるようにしていた。（細井）

③齊藤和也さん(昭和12年生まれ) 杵築市広小路 【青表問屋】森久兵衛商店

森久兵衛商店出張所は杵築市広小路にあった青表問屋である。商号に蛇の目文様を使用しているため、通称「森久蛇の目商店」または「蛇の目」と呼ばれていた。森久兵衛商店出張所は出張所という名称からもわかる通り、地元青表問屋ではなく大阪長堀橋に本店を持つ支店であった。『豊後の七島い—その歴史を追って—』によれば、森久兵衛商店は明治15年（1882）に大分、明治24年（1900）に杵築にそれぞれ支店を置いた。これは、明治5年（1872）に杵築の筵会所が廃止されたため、仲買人のみが残り大阪や東京の商店は荷揚げだけを待つわけにいかなくなったためであった。

話者と森久兵衛出張所のつながりは、昭和7年（1932）に森久兵衛商店の丁稚として働いていた話者の父・斉藤正士氏が暖簾分けされていたことによる。正士氏は店を任せられた後、昭和14年（1939）10月2日に新たな倉庫を改築し、料亭亀井（杵築市大字杵築六軒町）で竣工祝いを行うなど店の規模を大きくし商売に成功していたことがわかる（資料4）。当時の森久兵衛商店出張所（以下：森出張所）は現在の範囲よりも広く、店舗の他に現存している倉庫と杵築市生涯学習館の位置に二階建ての倉庫の二棟であった。また正士氏の時代の流通は、海運が中心であり、年間1万束を船に積んで大阪に出荷していた。森出張所は「大黒丸」という船を持っており、倉庫から馬車で城鼻の港に運んでいた。船が出向してから台風の情報が入ると、正士氏は家族全員を仏壇の前に集めて航海の無事を祈っていたそうである。

話者・斉藤和也氏は昭和12年（1938）に正士氏の7人兄弟の次男として生まれた。和也氏は近所からは「蛇の目のボン（男の子）」で通っていた。また当時の七島問屋は羽振りがよく、母親は毎日着物姿で、姉も琴を習うなど周囲からはお嬢様扱いであった。

和也氏が店を継ぐことになったきっかけは長男である兄が東京に就職したため、高校を卒業してすぐ問屋業を手伝うこととなった。森出張所では店を取り仕切る「一番番頭」と「二番番頭」がおり、その手伝いとなる「ナカシ」数名で運営していた。和也氏の場合は、手伝いだけでなく、番頭と二人一組となり入社当初から店の段取りを習得していった。そして、昭和36年（1961）に店を継ぎ、昭和40年まで森出張所を経営した。森出張所は昭和40年に閉店したが、経団連の資金援助を受け昭和47年まで七島筵を扱った。

問屋の一年間は、5月から8月までが挨拶回りや注文取り、9月から4月までが買い付けや出荷であった。挨拶回りでは、得意先が多い東北、関東、関西を回り、それ以外のところにも手紙を送るなどして、問屋の一年の中では比較的時間にゆとりのある期間であった。

ちなみに和也氏は父のあとを継ぐ際の条件として、この期間に趣味である将棋の道場に通えることとした。そのかいあって、和也氏の将棋の腕前は、全国生協連将棋名人通算3期、大分県挑戦者大会3位などの成績を修め、現在では大分県将棋連合会理事を務めている。

昭和30年代、日本の炭鉱が盛んであった時の七島表は備後表の3倍の価格で売れた。出荷した七島表は炭鉱住宅で使用されることが多く、色よりも丈夫さが一番であった。そのため、生産者である農家には「6貫物を50束作ってくれ」という依頼を出していた。当時の森出張所では、6貫から6.5貫で良質な筵は4000円で引き取っていた。平均的な筵の価格は3000円ほどであったが、雨に濡れたものは2000円ほどに買値が落とした。

森出張所の七島筵の集荷方法は農家に直接買い付けに行く方法と農協が開催する共販の2種類であり、集荷の割合は前者が3割、後者が7割であった。

農家からの買い入れ先は、国東（国東市）、富来・朝来（国東市安岐町）、そして北杵築より東部（杵築市）であった。これらの地域の中でもっとも良質のムシロを生産していたのは朝来であった。一方、大分や大神（日出町）の筵は畑作栽培による七島藪を使用するため硬くて薄いものが多く、見るだけでほとんど買い付けは行わなかった。また農家からの買い付けには、七島藪ができる8月以降に織ったものと織ったムシロを年末まで納屋で保管されていたものを買取る方法があった。このような農家で作り置きしてあるムシロを問屋の間ではカコイムシロと言った。森出張所が農家から買い付ける場合は、ほとんどがこのカコイムシロであった。カコイムシロの買い取り価格の決定は博打と一緒だった。500枚ほど重ねてあるムシロを3、4回適当な箇所をめくって色と状態を判断して値段を決定した。開いた箇所以外に品質の悪い七島藪が混ざっていた場合でも、わからずに高い値段を付けた場合は損をしてしまう。そのため買い取りは10円単位で値切りが行われた。

共販を行う時は、吉見商店、河野宝策商店、株式会社杵築西川と一緒に日にちを合わせて各農協をまわった。朝9時に出発し、15時までに守江、東守江、奈多、西安岐、南安岐、武蔵、国東の順番で各農協をまわった。和也氏は高校2年でトヨペットの免許を取得し早くから運転手として共販に同行していた。共販は流れてくる品をそれぞれの問屋が値段をつけて、一番高い値段を付けたところが購入した。だいたい問屋同士の見立ては10円も差がなかった。しかし、どうしても品が必要な問屋があった時は前もって話し合い、問屋同士で融通を利かせることもあった。和也氏も共販に加わる用になった当初は、ケンダイに流れて来る品を2回ほどめくって10秒以内には値段を付けるようにしていた。そそれ以上かかると他の問屋から怒られていた。

この時、値段の交渉をするに使用するのが符牒という暗合した数字である。符牒にはダイからマルという全国の問屋で通用するものと自分の問屋だけで使用されるものの二種類があった。蛇の目の符牒は「コ・ト・シ・モ・イ・ヤ・サ・カ・エ・ル」であり、これが数字の1から10に対応していた。例えば、「イト」といった場合は5200円または520円を示した。

共販の時の支払いは手形であったが、カコイムシロの買い付けは現金であった。そのため、農家に買い付けに行く時は腹巻きの中に1000円札で20万円は用意していた。買い付けたムシロは、トヨペット（1トン積みのトラック）に乗せて運んだ。積むとかなりの高さになるため、うまく積まないと坂道で荷が崩れたり、車が倒れかかるようなことがあった。当時は、積載オーバーや乗車人数オーバーでは捕まることはほとんどなかったが、一旦停止ではよく捕まっていた。

こうして集められたムシロは上・中・下に分類し、さらにその中で10段階に選別して、注文が来るまで倉庫で保管していた。分類の基準は色や厚みで、40束買い取ればその内の5束は間引かなければいけなかった。倉庫には常に300束は保管されており、注文が入るとナカシが倉庫から出して10枚一束にして出荷した。出荷の際には、化粧縄を施し、印銘を書き込んだ。化粧縄は全て同じではなく、森久兵衛商店では、上品質のものは縄を4巻した。そして「大抜」「本山」などの印銘を付けた。出荷が多い時は、250束ほどを蔵の前に並べて一斉に印判を打った。また、出荷するためには大分県の検査場の朱色の「大分

県」（表1-■）の印判が必要だった。（細井）

④植木文一郎さん 昭和13年11月生まれ 大分市田室町 【青表問屋】吉見商店

吉見商店は地元の青表問屋の一つであり、通称、植木商店として名が通っていた。正式な店名は青表問屋吉見商店であり、話者の祖父にあたる初代植木文蔵が青表問屋を始めた。店舗と倉庫は離れた位置にあり、店舗は現在割烹備後屋となっているが建物自体は当時のままである。一方倉庫は城鼻にあったが現在は取り壊されている。創立時期はさだかではないが、初代文蔵が亡くなったのが昭和11年9月11日であることから、店を開いたのは明治終わりから大正初期ではないかという。『豊後の七島いーその歴史をおってー』にも、明治35年以降は県内の仲買人も移出業者としての力を付けはじめ、県外からの森久商店や西川商店を凌駕する業者も登場し始めた時代であったとあり、適当な年代といえる。

（旧）『杵築市誌』によれば、初代植木文蔵は一代で、「豊後表の半数は杵築から、杵築の半分は植木商店から」と言わしめるほどに盛業し、本業以外にも町会議員や豊後筵業組合長を務めた。また七島蘭試験地を杵築に誘致し、晩年には青筵神社の創建に奔走した。青筵神社は昭和11年10月に落成式を迎えたが（写真21・22）、それを見届けることなく初代文蔵は病床に倒れた。

現在、杵築城のある台山の麓にある大鳥居は、元々は台山中腹にある青筵神社の直ぐ近くにあったものだが、市民会館建設のために現在の位置に移動した。この大鳥居には左柱に植木文蔵を中心の親戚の銘が彫られており、右柱には七島蘭関係者の名が連なっている。

青表問屋や地元振興は話者の父である二代目植木文蔵に引き継がれた。二代目植木文蔵は、昭和50年4月30日から昭和57年5月24日まで杵築市長を務めた人物であり杵築の地域振興に多大な貢献をした人物であるがその業績について今回は割愛する。

話者植木文一郎氏は昭和13年11月23日、二代目植木文蔵の長男として生まれ、大学入学まですべて杵築で過ごした。大学卒業後は、国東線と日豊線を乗り継いで大分市にある鶴崎パルプに一年半勤めた。その後、昭和36年9月から問屋業を引き継ぐために吉見商店に入社した。入社当時の吉見商店の従業員は社長の二代目植木文蔵、番頭の西山氏・久徳氏の2名、事務員2名、ナカシ数名の合計10名ほどであった。

入社当初の文一郎氏の仕事は、倉庫のムシロ（七島表）の整理整頓と墨造りであった。問屋の間では七島筵のことをムシロと呼ぶのが一般的であった。倉庫には天井近くまでムシロを積んでいたため、倒れないように積むのも技術の一つであった。その後トラックの免許を取得した後は、県内の仲買人が集めたムシロの集荷が主な仕事となった。吉見商店と契約していた仲買人が、亀川（別府市）、大神（日出）、杵築、大田（杵築市）、安岐（国東市）、国東地域にそれぞれおり、仲買人から「今日は〇〇束できた」という連絡が入ると集荷に行った。集荷地域の中で最も品質が良かったのは安岐だった。杵築の中では大内山や北杵築が良品だったが藤の川では少し質が落ちた。大神（日出町）周辺からも集荷はしていたが、畑シット（畑作栽培で作る七島蘭）であるため、光沢がなく、感触もガサガサしており品質はあまり良いものではなかった。もう一つの墨造りは主にナカシの仕事で、大きな摺鉢に長さ一尺（33cm）ほどのニカワ入りの専用墨を水と一緒に入れて擦った。一回に作る量は2~3リットルで、一度作ると二週間ほど持った。固まってしまっても水入れれば元に戻った。実際に墨を使う時は、七輪で温めたものを使用した。

ムシロに墨入れをするのは番頭の仕事であった。品質をそろえた10枚を一束にしたムシロは中央に七島藪縄で飾り縄が施され、綱より上半分には吉見商店の商号であるツジヨシ（表1－■）や取引先商号または品質を表した小印を書き込んだ。小印は時によって変わるが、話者の記憶では最上のものにツジヨシ、上質のものにマルキチ（表1－■）、あまり品質がよくないものにマルキョウ（表1－■）を用いた。併せて話者の記憶では、表2のような小印を頻繁に使った記憶があるそうである。

また下半分には符牒と言われる取引相手同士しかわからない暗号化した価格を記した。吉見商店では「桜島」「鎌倉」などの他、昭和40年の相場表（図2）には「日英同盟」や「国防」など時勢を表した符牒が使用されていた。

文一郎氏が完全に店を任されたのは、二代目文蔵が市長選に立候補してからの昭和50年からであった。番頭の一日の仕事は朝8時に店舗に出勤し、その日一日の段取りを指示することから始まる。同時に店舗では直接ムシロを売りに来た農家やイチビの販売を行っていた。イチビは縦糸に加工する前の皮状の物をいつも16貫ほど仕入れており、これを農家が購入し、糸状に加工してムシロの縦糸にしていた。店舗での終わるのが午前10時頃で、そこから倉庫に向かい各地から集荷されたムシロを品質ごとに選別を行う。選別作業は4人一組で行う物で、見台を中心に番頭2名が向かい合い横からナカシがムシロを運んでくる。主となる番頭がムシロに触れた感触から色、重さ、キズの有無を見て左記の順で格付けし等級を分ける。検品が終わったものは補助となる番頭によって軽くまるめられ、運び込んだ方向とは逆の方向にいるナカシに手渡す。この作業を続け同じ等級のムシロを10枚そろえて一束にして化粧縄を施し、墨入れを行う。出荷に必要な数量がそろえると豊後通運に依頼をし陸路で商品を発送した。発送はワムといわれる貨物車を使用していたため、注文の際は「ワムで一車積んでくれ」というような注文方法であった。積載は無駄を出さないために満杯の状態に運ぶため、豊後通運の従業員では依頼した数量をうまく貨物車に積むことが出来ず、度々、ナカシが加勢をしていた。このように文一郎氏の時の県外への出荷方法は国東線で運ぶことがほとんどで、船で出荷するのは子どもの頃に記憶にある程度だという。この作業がおよそ16時頃までつづき、その後は掃除をして一日の業務が終わる。一日の作業が終わると、問屋衆は度々亀井や若栄屋などの料亭に集まり、互いの情報を交換する場を設けていた。

一年間を通して、電話、電報、手紙または直接買い付けなどによって注文が入るため、年間およそ5000束を取り扱っていた。特に注文が集中したのが正月前で、逆に少ないのは梅雨時期だった。主な取引先は、群馬・栃木・茨城の関東地方と福島・山梨・長野などの中部・北部地方であり、炭坑が盛んであった時は北海道の炭坑住宅用として多く出荷した。その理由の多くが耐久性があり火に強いからであった。これらの得意先には必ず1年に1回は出向くのも番頭の仕事の一つであった。しかし、炭坑閉鎖などにともない昭和40年を堺にムシロの取り扱いが激減した。そのため、今も吉見商店の登記は残っているため店は閉めていないが、その頃からムシロの取り扱わなくなった。当時、文一郎氏の記憶にある杵築の問屋は、地元問屋では熊代、河野・元島・山崎・本多、県外の問屋では西川・蛇の目であった。

聞き取り調査の最後に、当時の貴重な写真を拝見した。写真1・2は杵築市下司周辺の七島藪栽培作業の風景である。写真3・4は、青筵神社などの前で度々開かれた共進会の

様子であるが、写真に写っているのは杵築中学校のグラウンドで行われた時のものである。また写真5・6は一緒に行われる七島藺の品評会のものではないかということである。この他にも吉見商店に関する貴重な写真は大分県立公文書館に「杵築古写真」として保管されている。(細井)

⑤河野喬二さん 昭和6年生まれ 杵築市大字杵築魚町 【青表問屋】河野宝策商店

河野宝策商店は、通称カネホウ(表1-■)と呼ばれていた地元の青表問屋である。『興亜日本建国史』の河野恒次氏の項には河野家と青表問屋創始の記述がある。これによれば、河野家は杵築藩にて武具方を務める藩士であった。また問屋業をはじめた初代河野宝作は、青年時代速見郡藤原村村に移住し、一時醸造業を営んでいたが成功しなかった。そのため、故郷の杵築村に帰郷し、明治30年頃から青表問屋の営業をはじめた。また、日本だけでなく中国への七島表の輸出を行い、卸売買商として成功したとある。

初代河野宝作に関する青表問屋に関することは、子孫によってより詳細情報と共に伝わっている。それによれば、酒造業を営んでいたのは赤松(日出町)周辺であった。当時は空調管理が難しく、2年続けて酒を腐らせてしまったために廃業することになったという。そのため、明治30年から問屋業を始めた。始めた当初は元島商店の仲買人だったそうである。その後、大正期に独自の店を構えた。店の倉庫は現在の魚町筋にある、フリーマーケットふれあいサロン人生風便り(杵築市南杵築70-3)の位置にあり、事務所は道を挟んだ向かいにあった。

その後、問屋業は二代目河野宝策として話者の叔父にあたる河野恒次が継いだ。恒次氏は明治26年に初代宝策の長男として生まれ、77歳で亡くなった。経営は大正5年から七島表の海外輸出を拡大し、杵築の中で屈指の青表問屋に成長させた。また町会議員としても活動し問屋業だけでなく杵築の地域振興も努めた。しかし、恒次には実子がなかったため、店の経営は35歳になった弟の哲夫氏(話者の父)が主体となっていた。

話者である河野喬二氏は昭和6年に哲夫氏の次男として生まれた。中学生の頃学徒動員中に終戦を迎えたため、杵築高校に進学し、昭和25年に卒業した。卒業後は医者を目指し大学に進学するつもりだったが、長男である兄が戦争による負傷で店を継げる状態ではなかったため、喬二氏が店を手伝うために河野宝策商店に入社した。入社当時の経営体制は、社長・二代目宝策、専務・哲夫氏、常務・一夫氏(初代宝策四男)を中心とし、ナカシ5名と丁稚が常時5名いた。丁稚には丁稚部屋が準備され、住み込みで働いており、学校も店から通っていた。

喬二氏は見習いとして入社し、一通りの仕事を覚えた後は仕入れ担当の番頭として働いた。河野宝策商店の仕入れ方法は、共販を主体として、仲買人からの集荷や農家への買い付であった。仕入れ先は箕浦、富来、朝日、武蔵、中武蔵、安岐、南安岐などでトラックか陸王というバイクに乗って集荷地を回った。トラックの購入は昭和40年頃で杵築の中では豊後通運や合同タクシー以外ではもっとも早く購入した。

9月から12月が最も多い仕入れ時期であり、共販では一回に1000束から1200束を一束平均3000円で入札していた。入札した品は自分のトラックか豊後通運に運搬してもらっていた。農家から売りに来ることは全体の割合の中では少なかったが、野田(杵築市)に直買所を設け、毎朝50から60束ほどを買い取っていた。この他にカコイムシロという品薄時期

に農家に保管されているムシロ（七島表）を購入することもあった。大概の農家はムシロを打って数束できたら販売するが、生活に余裕のある農家では作ったものを品薄になるまで蔵の二階に保管しておき、問屋への販売価格がもっとも高くなった時に売っていた。これができる農家は村の中でも2、3軒であった。カコイムシロの購入は博打と一緒に、品質の良いムシロが表面や上段にあっても、中段や下段にあるムシロの品質が良いとは限らず確かめた場所次第であった。

こうして集めたムシロは、問屋で一枚ずつ検品し、同品質のものを10枚一束にして出荷できる状態にした。検品はケンダイといわれる台の上で行われた。親方となる番頭の「入れ、抜け」という合図と共にムシロを抜くナカシと次のムシロを持ってくるナカシが素早く動く。台を挟んで親方の向かいにはムコウウチという親方の補助となる番頭がおり、品質が揃ったものを簡単に一束にした。

検品が終わるとそれぞれの取引先の情報や価格などを親方が墨入れして出荷した。墨入れできるのは親方だけであった。河野宝策商店では、もっとも品質の良いものを「本段」とし、本段の中でも最上位のものを「青王」、続いて「松葉色」という印銘を使用していた。喬二氏の記憶では本段が14種、中段が18種であった（表3）。ちなみに本段の中で6番目に当たる「稲乃寿」は初代宝策が酒造業を営んでいた時の酒の銘柄から名付けたものだそうである。河野宝作商店では毎日500束を出荷しており、少ない時でも300束を出荷していた。注文は福岡や北海道の炭鉱住宅と柔道畳としてのものが多く、主な得意先は北海道、東北、茨城や群馬の関東であった。得意先の中で特に印象的なのは福島県の鈴木チヨという女性の間屋であった。実際に直接杵築まで買い付けに来たほどだった。このように直接買い付けに来た場合や招いた得意先は別府の旅館で宿泊させてもてなしていた。このようなサービスは農家にも行っていた。例えば、正月2日はハツガイ（初買い）といって、多くの農家が直接ムシロを売りに来た。そのような農家には酒を一杯振る舞った。さらに特に良く買い付ける農家は大宰府などの三社参りに招くなどしていた。

各地に出荷するにはワムとよばれる貨物車を利用した。一度に400束程度を積むことができた。極力無駄を少なくするため、急に30束程度の注文が入った場合は、酒を一升もって行って交渉をして詰め込んだ。このような交渉は哲夫氏がひじょうに長けていた。

これらが問屋における主な仕事で、一日の流れにまとめると次のようであった。

仕事の始まりが最も早いのは丁稚で朝5時頃から墨作りが始まる。その他の従業員は時頃に出勤した。喬二氏の場合は、野田などの直接販売に来た農家からの買い取り対応をして出勤した。出勤後はムコウウチなどの検品作業を午前中に行った。昼食が済んだ後は店では出荷作業となるが、喬二氏は集荷や入札に向かった。仕事は20時くらいまでで、最後の作業はムシロを綺麗に積むことであった。積み方には決まりがあり、6束を一段として16段まで積み上げるため技術が必要であった（写真21）。夕食は丁稚には備後屋の弁当などが準備され、哲郎氏などは料亭亀井に行くことがほとんどであった。一方、喬二氏は集荷に行った先で済ませることが多く、家に帰って夕飯を食べた記憶はほとんどないそうである。集荷先では毎晩のように料亭によばれており、よく利用していたのは、山荘楼（国東）・伊予屋（国東）・テツキヤ（西安岐）・大黒屋（安岐）・ヤマカン（安岐）・亀石（富来）であった。当時は毎日飲んでも金が貯まるほど羽振りがよかった。その盛業ぶりは喬二氏が小学校三年生で金歯を二本入れることが可能であったことや大学に進学し目指

そうとしたことからもうかがえる。

河野宝策商店でのムシロの取り扱い量は年間10万束を超えていた。このような数を取り扱っていたのは杵築で河野の他に植木（吉見商店）と西川（西川甚五郎商店）だけであった。ところが昭和40年を過ぎると急に七島藪の取り扱いが少なくなったため、昭和47年に店を閉じることとなった。（細井）

⑥元島三男さん 昭和5年生まれ 杵築市大字杵築南祇園 【青表問屋】元島徳治商店

元島徳治商店は現在、杵築市内で唯一七島表の商いを続けている問屋である。元島徳治商店の前身は元禄期の記録に見られる三原屋という古い商家であった。店は青表問屋が集まる八坂川に面した現在の生涯学習館の横に構えており、西川甚五郎商店や森久兵衛商店にムシロを仲介する問屋であった。しかし、話者の父である元島徳治氏の一回の失敗で閉店となり、店舗などは森久兵衛商店に売却した。写真■は閉店以前の青表問屋を営んでいた頃のものと思われる。原因となったのは大正12年に起きた関東大震災であった。震災直後、30歳であった徳治氏はすぐにムシロに需要があると判断し、相当数のムシロを集めて船で東京に向かった。しかし、横須賀に着いても荷揚げして保管しておく場所がなかった。そのため、野積みにするしかなく、水に濡れるなどしてほとんど商品価値がなくなってしまった。また早く到着しすぎたため、復興も始まっておらずほとんどが売れ残ってしまった。この失敗で経営が悪化し一時閉店することになり、母方の家にある田んぼを耕して生活の糧を得ていた。

昭和5年に生まれた元島三男氏はこの話を父徳治氏が晩酌のする際にいつも聞いていた。商売を再開する準備はしていたが、戦争によるムシロの統制によってなかなか再開する目途が立たなかった。昭和25年、三男氏が大分大学商業部の卒業とともにムシロの統制が解除されたため、南祇園（杵築）で店を構え、父とともに青表問屋を再開した。店名は父の名をとって「元島徳治商店」とし、商号はカネモトであった（表1-■）。北祇園（杵築）にある現在の母屋となっている場所に店を移したのは昭和31年であった。この建物は明治25年に建てられた安田という名家の家が空き家になったため買い取ったものであった。

店を再開した当時、元島徳治商店のムシロの取り扱い量は上から数えて7番目くらいであった。西川甚五郎商店、森久兵衛商店、吉見商店、河野宝策商店、本多マコト商店、江藤カンイチロウ商店などが多く取り扱っており、元島徳治商店はそれに続くような感じであった。

元島徳治商店の集荷方法は、直接買い付けが主であった。ほとんど仲買人はつかわず、直接従業員が農家に買い付けていた。主な買い付け先は安岐と杵築で、毎日3人の従業員が買い付けに回った。特に8月15日以降に作られたムシロはシンウチとあって、これが出始めると買い付け時期の始まりであった。ムシロの品質は、朝来や安岐谷がもっとも良かった。国東に入るとわずかだが品質が落ちた。藤の川、北杵築、八坂も同様であった。大神のものは中クラス以下のものが多く、これは畑栽培の七島藪を使用していたためであった。話者が感じていたのは、砂地の土地はあまりいいものが出ていないような印象を受けていた。

買い付けにはバイクを使用しており、トラックが普及し始めた後はトラックを使った。三男氏の記憶では、バイクが登場したのは昭和28年頃で元島徳治商店でもクルーザーとい

うバイクを購入して買い付けに使っていた。それ以前は自転車で各地を回っていた。

一日に100から200束買い込み、多いときで月に500束を出荷していた。

集荷されたムシロは、およそ15段階に分けられた。元島徳治商店では最も最上位の品質のムシロには「天」、続いて「地球」「富士」などといった印銘を付けていた。写真■のムシロにはカネモトの小印があるため、元島徳治商店時代に入ってからのもと考えられる。これによれば、印銘は10段階あり、「天」「体」「寿」「萬」などの文字が記されている。

出荷の方法は、杵築駅から貨物車に積んで運ぶ陸路であった。そのため、北祇園の横にある倉庫とは別に宗近（杵築）に5倍以上の大きさの倉庫を建てた。三原屋時代には海路で運んでいた記憶があるそうである。先述の通り、当時は店が八坂川に面したところであったため、店に集めたムシロを小舟に載せて守江港まで運んでいた。そこからは大型の北前船のような帆船で大阪や関東に運んでいた。帆船を出していたのは別府の日名子という人であった。

主な取引先は北陸、北関東、東北、長野・岐阜・山梨などの中部地方であった。七島表は「強くて安い」のキャッチフレーズで全国に売れていた。注文は直接各地の荒物問屋から入った。最も売れたのが養蚕地帯、続いて炭鉱住宅、そして柔道畳としてであった。元島徳治商店の主な取引先も養蚕を生業としている地域が多く、耐火性が高く丈夫であったために人気があった。しかし、中国製の絹織物が輸入されるようになると徐々に注文が減っていった。炭鉱住宅で売れたのは、何と云ってもその耐久性であった。炭鉱住宅から主に注文があったのは、「下モノ」といわれる色あせた七島表であった。これも炭鉱の閉山と共に注文が減っていった。柔道畳の場合は、耐久性とへりを必要としないため足がひっかからないという理由か需要があった。しかしこれもビニール製のマットが登場して注文が減っていった。

昭和25年以降、県内の青表問屋はおよそ40軒であった。内訳は、大分8軒、日出2軒、安岐7軒、国東10軒、杵築13軒であった。どの問屋も上記のような東北や北関東を取引先としており、注文の理由も同じようなものであった。これほど栄えた七島藪が現在、杵築にないのはふたつの理由があるという。ひとつは八坂善一郎市長時代に七島藪は重労働であることから柑橘栽培を奨励し、徐々にみかん農家が増えていったこと。もうひとつは、出荷先のさまざまな理由でムシロの需要が減り、販売が減少したことである。このふたつがほぼ同時期に起こったため、杵築から七島藪の姿は消えたとのことである。

実際に七島藪で商売ができたのは、昭和43年が最後で、2年後の昭和45年には完全になくなっていった。そのため、元島徳治商店では、畳、襖、障子といった内装と不動産を扱うようになり現在に至っている。（細井）

⑦武津典人さん 昭和4年生まれ 大分市金池町 【青表問屋】武津仁三郎商店 七島い買い付け

武津氏の父・仁三郎氏は戦前に米店を経営されていたが第二次世界大戦が始まると市内の米店が統合されてしまい、戦後には金物屋始められた。戦前から米店のかたわらゴザの仲買をしていた仁三郎氏は知人の問屋から協力を頼まれ、10年ほど金物屋をされたあと、青表問屋をはじめたそうである。

武津氏自身は高校を卒業後、病院に1年間勤務されたが、20歳の時に家業を手伝うことになり、退職された。結婚されたのは25歳の時だという。武津氏が30歳頃までは金物屋を、それ以降は「大分県特産青表問屋 武津仁三郎商店」を家業としていて、約20年間、青表問屋に従事されたという。

仲買の仕事は二日おきに父・仁三郎氏が自転車で主に方島、津守、植田方面まで買い付けに行き、品質で値段を決めて、三〜四千元ほどで買い取っていた。農家にとっては唯一の換金作物で、直接買い付けるほうが仲買、農家ともお互いに利益が大きかったが、農協の共同販売にも月に一度参加していた。共同販売は仲買の利益はあまり出なかったという。買い取った青表がまとまった量になると、馬車引きに頼んで商店まで送り届けていたという。また国東まで買い付けに行くこともあり、買い付けた七島いは武津氏がトラックで回収していた。経済的にゆとりのある農家では3月頃まで青表を保管しておき、値が良いときに売っていたそうである。

仕分け作業は武津氏の担当で、商店の裏にある倉庫でおこなわれ、そのまま保管された。作業は1束10枚で買い付けた青表を色、品質で選り分け、等級をつけていくのである。青表とは商売上の呼び方で、大分市の方言ではゴザといった。等級をつけた青表は1束に重ねた状態で丸めていき、等級を墨書きしていたそうで、その重さは20〜25kgほどにもなったという。品質を見極めて等級をつける作業は武津氏がおこない、奥さんがムコウウチと呼ばれる等級分けした青表を揃えていく作業を手伝ったそうである。

仁三郎商店の主な取引先は東京の業者で、東京に住む叔父(仁三郎氏の兄)がその販路を開いた。業者との取引は日本通運の貨物証券と為替を利用して行っていたが、一度も不渡りを出すことなくやってこれたのは叔父の協力あってのことだという。また青表の出荷の際には大分県の職員が立ち会っていたといい、大分県の特産品としての位置づけがうかがえる。青表の商品価格は高いもので1束五千元ほど、安いものは千円しなかったといい、一番の売れ筋はお多福と呼ばれる四千元程度の価格帯の商品であったそうである。商店の倉庫には6月頃まで青表を保管し、業者に卸すことが出来た。

青表問屋の仕事はサイクルが決まっていたそうである。青表の生産が始まる9月頃から忙しくなり、収入も増えるが、この繁忙期に一年間の生活費を確保しなければならず、決して派手な生活はしなかったという。仕事が少なくなる7、8月にも派手に遊んだり、旅行などはしなかった。それは自分たちだけでなく、世間全体がそうであったと感じているという。

正月になるといつも買い付けている得意先の農家が1束、2束の青表を持って、新年の挨拶を兼ねて商店を訪ねてきていた。このとき商店では酒を振舞い、品質の良いものを卸してもらえるよう農家の人たちを接待する。農家の人たちはこれが楽しみでもあり、お互いに気持ち良く取引ができるように親交を深めていた。

生活の基盤であった七島藪は近代化の影響を受けて衰退していった。大分市内に工場ができ、農家の若者たちも働きにでるようになった。また市内での宅地需要が高まり、田畑が売れたことで七島藪を栽培する農家も減ってしまったという。しばらくは杵築、国東まで買い付けに行っていたが七島藪での生活は難しくなった。七島が無くなると生活のすべてが変わってしまったという。

大分に新日鉄ができ、農家の若者が働きにでるようになった。武津氏が青表問屋をやめ

たのは50歳頃であるが、七島藪が無くなると、すべてが変わってしまったという。(内野)

(3) 畳屋

①河野次子さん 昭和9年1月生まれ 国東市安岐町大字富清 【畳屋】

私はもともと大字富清の恒清の生まれですが、職人じゃった親が子どもには勉強させたいと、別府の亀川に住まいを移したので、2歳年上の兄とともに亀川尋常小学校を卒業しました。戦後、別府に進駐軍が来ると聞いて、女学校の2年生の時に富清に戻ってきました。兄はそのまま、母の実家に預けられて旧制中学校を卒業しました。私が地元の新製の安岐中学校に入った頃、2クラスありました。中学校を卒業した後、西武蔵高等学院に2年間通って洋裁や和裁などを習いました。

昭和29年(1954)、私は20歳の時、畳職人だった河野國明と結婚しました。主人は昭和6年6月生まれ、私は昭和9年1月生まれで、3歳違いでした。主人は次男だったので、畳職人だった父親の河野進から技術を習って職人になりました。結婚当時は、西武蔵小学校前の道路際の家で暮らして畳屋をしていました。当時は借家でしたが、六畳二間、四畳半二間に台所がつき、土間だった店の方が広い家でした。

私は3年間ほど畳の床作りをして、主人の手伝いをしました。幼い子どもを床の上に乗せて、畳の床作りをしたものです。主人の父親の時代は踏み床で、人力だけで畳の床を作っていましたし、その頃はシットウ(七島藪畳)ばかりでした。しかし、私が畳の床作りをする頃には、床作りの機械が入っていました。とは言っても人力の機械です。今のようにポリエチレンなどを使った畳床を買ってきて使うのではなく、当時、畳屋は自分の店でワラドコ(藁床)を作っていました。藁床はイナワラ(稲藁)を何層も重ねて作ります。西武蔵の谷の農家からワラコヅミ(藁小積み)ごと買って、ノーシロ(苗代)前に持ち帰って、掘っ立て小屋の倉庫に稲藁を保管しておくのです。ワラ(藁)2シメで1枚の畳床を作っていました。畳床を作る時、まず、一番下になるコモ(菰)を台の上に広げます。菰は藁で編んだ粗いムシロのことです。その上に藁を縦横に順々に置いていき、隙間にアクタ(芥)といってカス(藁屑)を入れます。芥で床の厚みを調整していたのです。藁の層は7段にします。一番上の藁は良くすぐったもので、きれいに並べていきます。機械のハンドルを13回廻して畳床を締め、太い糸で縫っていくのです。床作りではほこりが立つのが嫌でした。子どもが幼稚園の頃、慢性盲腸炎になったので、畳の床作りをやめざるを得なくなりました。

西武蔵小学校の入口近くに住んでいましたので、10年間ほど店先で学用品や食料品を売っていました。その頃、学用品や食料品は掛け売りで、盆暮に集金したものです。

調理師の免許を取って、昭和44年から西武蔵小学校で給食作りを10年間しました。安岐町給食センターができたので、安岐の保育所に勤め、昭和62年からは西武蔵小学校の用務員を4年間して、57歳の時に退職しました。主人の手伝いだっただけの期間は短かったのですが、畳屋の仕事はよく見ていましたし、時々、手伝うこともありました。

シットウダダミ(七島畳)を頼まれた時は、注文主がシットウ(七島表)を持ってきていました。富清のたいていの家では稲作のかたわら七島藪を植えて、冬に七島表を織っていました。1反(約1,008㎡)ほど作っておけば、一冬分の七島藪表を織ることができたんです。

七島表を織るのは主に女の人でした。七島藺を植える頃はまだ寒く、暖かくなると、カシキといってムッカラ(麦稈)を敷いて雑草が生えんようにしていました。そして、真夏の暑い盛りに刈り取ったものです。農協の人やムシロカイ(筵買い=七島表の仲買人)が家々を廻って買っていました。主人も若い頃に兄さんから借金して七島藺表を買って廻っていたんです。

昭和50年(1975)頃にはビンゴ(備後表=丸藺表)の畳が増えてきました。その頃はシットウ(七島藺表)よりビンゴの方が安かったんです。

田中角栄首相の「日本列島改造論」が出た頃(昭和47年[1972])、畳製造の機械を買いました。

主人はすぐに行動する人でしたので、山口県の畳業者の所に見学に行き、購入を決めました。カマテする機械(表張機)と縁をつける機械です。カマテする機械とは框部分で畳表を折って引っ張る機械のことです。お金を払ったのに、なかなか機械が来なかったことを覚えていきます。

この昔の請求書を見てください。昭和62年(1987)のものですが、新床一枚7,500円、表替1,500円、備後2,500円、七島表3,300円となっています。もう一枚もこれも同じ昭和62年の請求書で、新床は一枚7,000円と6,800円のものがあります。どちらも備後表でしょう。平成元年(1989)の領収書には新床七島表は一枚9,100円、新床備後表は6,800円となっています。結構値段の差があります。この頃、七島表も問屋から取り寄せていたんです。こちらは平成13年(2001)の請求書ですが、備後表一枚3,500円、新床3,500円、へりてま(縁手間)3,000円となっています。畳屋への支払いは昔からその時その時ごとの現金払いでした。

備後表は熊本県の八代や広島県から来ておって、杵築の本島商店から仕入れていました。また、吉沢商店からも備後表と共に糸や畳のへり(縁)などの材料をもらってました。昔は畳の縁といえば、黒ばかりじゃったが、今のものと違ってとても弱かったんです。それに模様の入ったモンベリ(紋縁)は日焼けしやすかった。

主人は七島畳を作るのを苦にしました。備後表の畳作りより大変じゃったから。昔は七島畳に縁の布はつけんやった。備後表の場合は、畳床の縁に添って畳表を裁ち落として、縁の布を縫い付けるので、仕事が楽じゃった。その点、昔の七島畳では縁で七島藺表を曲げて縫い付けるので力仕事でした。巻いた七島表の両端を洗面器の水に漬けてゴザ(莫菴)を被せてウムした(蒸した)んです。そうすると軟らかくなって、折り曲げやすくなるんです。それでも大変力のいる作業でした。その後、縁の布が丈夫になって(合成繊維になったため)、七島畳に縁をつけてくれという注文が次第に増えてきました。私が住んでいる今の家は、昔の家が道路拡張のため立ち退きにあったんで、道路の反対側に平成3年(1991)に建てました。主人が座敷の畳を作りましたが、縁付きの七島畳です。

主人は畳屋のかたわら、いろんな副業をしていました。頼まれて木を伐ったり、田植えをしたり、コンバインで稲刈りをして廻ったりしていました。水田を5反ほど借りて米も作っていました。主人は活動的な人でした。でも、平成16年に病気で亡くなりました。72歳でした。それでも亡くなるまで畳屋をしていました。(段上)

(4) 織機製作所

①宮川武さん(旧姓鈴木) 昭和7年生まれ 杵築市大字杵築北浜【製織機業者】宮川製作所

宮川製作所の宮川武氏は現在、唯一、七島製織機を作成及び調整できる人物である。

宮川製作所の前身は静岡県の製織機会社「丸鈴」だった。1941年頃、静岡県袋井市周辺では丸キョウ、丸テイ、丸鈴という3つの製織機会社があり、ここで製作されたも商品は静岡製機と呼ばれていた。この丸鈴を経営していたのが武氏の父鈴木荒太郎であった。

昭和23年(1948)、荒太郎氏は3名の職人を伴い杵築の地に丸鈴製作所を開いた。きっかけは荒太郎氏と交流のあった長野県の人物が大分県の七島蘭は今後も儲かる可能性があるという話をしたためであった。杵築に製作所を開いた当時は、静岡の製作所は閉めておらず、静岡で製作した製織機を輸送して販売していた。しかし、運賃がかさむため、昭和27(1952)年に静岡の製作所を閉めた。

戦時中、各製作所は農林省から乾燥機を作るように指導されていた。これを受け入れなければ製織機の製作をすることはできなかった。当時の農林省田島技官からは、間壁乾燥機(大阪製)に劣らない乾燥機の製作を依頼されていた。荒太郎氏は見事にその期待に応え、開発に成功し、静岡製機の中では最初に丸鈴の乾燥機が認められた。昭和30(1955)年以前に静岡周辺では遠州表の生産が減少し、工場の多くが閉鎖か転業していった。そのため、乾燥機の製作依頼のあった丸キョウや丸テイは製織機製作から乾燥機製作に転業した。しかし、荒太郎氏は転業することなく、製織機の製作を続け、七島製織機などを含めて20以上の特許を取得しいった。

丸鈴が杵築に移転した昭和26年当時、杵築ではジバタと呼ばれる足踏み式の製織機が主流で、岩下式2軒(兄弟で作っていたため2軒)と有田式1軒の合計3軒の製作所があった。ジバタは全て木製で、ノミや鉋を使って作っていた。これに対して丸鈴が製作する半自動の製織機はハヤバタといわれた。当時の大分の製織機制作の技術は静岡に比べて10年は遅れていると感じられたそうである。ハヤバタが入ってきた当時のジバタ制作業者は「ハヤバタはすぐにジバタに戻る」と言っていたが、実際にはハヤバタが主流となり、ジバタからハヤバタを制作するようになっていった。ハヤバタを制作していたのは、杵築の丸鈴式(後に宮川式)をはじめ、大分市大道の末田式、長崎県の大村式、福岡県柳川の佐藤式であった。後に岩下式もハヤバタを製作していた。

大村式は長崎の大村で始めた製作会社で、大分では長続きせず1、2年で撤退した。また佐藤式は福岡県柳川で始めた製作会社だが、元は静岡製機の技術者が始めたものだったので良い製品を作っていた。唯一の欠陥は構造により、イサシ(サオとも言う)を折る人が多く、購入者からかなり調整の依頼があった。製織機の部品の中で大事なものはベアリングであった。良いベアリングはゴミや油が入り込むことが少ない。ここが佐藤式の失敗したところで、メーカー品のベアリングではなく、社外品の農業ベアリングを転用していた。

昭和37年(1962)以降、製織機を製造していたのは、宮川製作所の他は岩下式と佐藤式だけであった。末田式は昭和40年(1965)にはすでに廃業していた。最後まで残ったのは宮川式と佐藤式だけであったが、昭和40~50年の間に宮川式のみとなっていた。宮川式が最後まで製造できたのは直接販売で消費者の声がよく聞くことができたからであった。佐藤式をはじめとする他の業者は仲介となる農具屋から注文を受けて販売したため、消費者

の音が届かなかった。

話者である宮川武氏（旧姓鈴木）は昭和7年に静岡県浜松で鈴木荒太郎氏の二男として生まれ、高校卒業まで静岡の地で育った。武氏は、高校卒業後すぐに父に呼ばれて大分の地に来た。そのまま父の元で働き始めたため、職人修行のような経験はしなかった。昭和29年（1951）にバイクの免許を取得し、ホンダの50ccバイクに乗っていたが、昭和30年くらいまでは主に自転車で修理に回ることが多かった。

昭和36年（1960）に独立し、翌年には妻の家に養子に入ったため、製作所名を丸鈴から宮川に変更した。独立当時の宮川製作所では年間500台の製織機を出荷していた。出荷先は、国東全体、日出の大神・川崎・藤原・赤松、山香などが多かった。宮川製作所では完全受注生産だったので注文を受けてから製織機を制作していた。その際に使う部品は静岡から輸入していた。静岡の鋳物と大分の鋳物を比べると月とスッポンというくらい部品に差があったそうである。

製織機の購入は早い者勝ちだった。受注を受けてから制作していたため、待たせることも多く、完成してすぐに取りに来ないと直接買いに来た人に持っていかれていた。武氏の中で七島製織機に納得がいくようになったのは昭和40年（1965）頃であった。この頃からほとんど故障のない製織機を製作できるようになった。製織機の製造や調整でもっとも難しいのは「つきが良い」状態にすることであった。「つきが良い」というのは、イサシが通る際、同時に動くアゼという櫛状の部分（目）が開く間隔がちょうど良い状態をいう。目が開き過ぎる（アゼとイサシが離れすぎている状態）とイサシが通りやすいため織やすいが、目が締まるのが遅くなり、結果ムシロの編み目が荒れてしまう。一方、目が締まり過ぎる（アゼとイサシの間隔が近すぎる状態）とイサシが通る際にヨリ（縦糸）を切ってしまう。この部分の調整が非常に難しく長年の経験を必要とする。武氏の場合、織機の動く音で、どの会社の製品か判別ができ、故障している箇所もわかる。製織機の中でもっとも壊れやすいのは、上から七島蘭を押さえるハとかアゼという部分であった。ここは常に糸が当たるため、摩耗して、悪くなるとバリバリという音がしだす。

昭和48年（1973）には、それまで北浜（杵築市）にあった工場を、現在の三川（杵築市）に移した。しかし、その時の七島蘭の耕作面積は、最盛期の3分の1程度になった印象で下火になっていた。実際、宮川製作所は七島製織機による儲けはほとんどなかった。昭和24（1948）年当時の製織機の値段はおよそ1万円であり、武氏が独立した時は、4万5千円だった。また製織機は製作よりも修理の注文の方が多く、出張修理は、安岐などの近隣で3000円、遠方になると4000円だったが実際の交通費を差し引くとたばこ代程度の儲けにしかならなかった。

より儲けたのは、みかんの小型選果機やトマトの選果機であった。特にみかん生産が盛んになって以降は、宮崎、熊本、鹿児島、佐賀など県外から多くの注文があり儲かった。そのため、武氏が現役で働いていた時は、宮川製作所には10人くらいの従業員を雇っていた。

製織機以外にも宮川式製作所では七島蘭に関わる分割機や乾燥機も制作していた。当時の分割機は池田式という静岡県浜松出身の人が制作していたものが出回っていた。その池田式が昭和40年頃製作をやめたため、それ以降の修理はほとんど宮川製作所が行った。池田式の分割機は能率重視のため、スピードが早すぎて綺麗に分割できないことが多かった。

そのため、七島藪が流れるスピードを3割遅くするような改良を行うとちょうど良かった。また乾燥機で特に改良したのは乾燥するための箱部分であった。それまでよりも棚を薄く五段にして一番下の段を抜くと残りの棚が自動的に一段下に降りるような工夫をした。このタイプの乾燥機は西武蔵の農家が今でも使っている。他にもトンボという、ウラカリ用の道具もよく修理をした。これは国東の人が発明したもので、棒の先に二枚の刃が付いており、ヘリコプターの羽根のように回転して七島藪の先端を刈る構造になっている。

平成27年現在でも武氏の所には製織機の修理の依頼が度々ある。また近年の七島藪生産の見直しによって、安岐では新たに9人ほどで結成したグループが宮川式製織機の製作を依頼した。今回の製作では、すでに製作されていない部品がほとんどのため、昔丸鈴時代に製作したハヤバタを改良する方法となった。丸鈴時代の製品は1枚のオサで構造になっているため、筵が厚くならなかった。そのため、宮川時代には2枚のオサで押さえる構造に改良している。平成に入ってから改良を依頼された製品はすべて2枚構造にしている。これまで半自動から全自動に改良する試みがあったが、藪草のような丸い茎であれば全自動が可能だが、七島藪のように茎が三角でさらに裂いて柔らかくなってしまっているものを全自動にすることは難しいとのことであった。(細井)

②岩下千登里さん 昭和■年生まれ 杵築市杵築魚町 【製織機業者】岩下農具製作所

岩下農具製作所は岩下富男(兄)と岩下福太郎(弟)の兄弟によって設立された。主にジバタと呼ばれる足踏み式の製織機を製作していた。岩下農具製作所で製作された織機は岩下式ともいわれ、足踏み式の特許を取得していた。国東、安岐、杵築など七島藪の栽培が盛んな地域の中で唯一のジバタを製作する店だった。福太郎氏は明治27年3月18日生まれであり、10人兄弟の次男であった。長男である富男氏は早くに製織機の製作をやめたが、福太郎氏は杵築市魚町(写真■・図■)に店を構え、製織機製作と大工を両立させて農具製作所を続けた。

福太郎氏には長男・信男、長女・久子、次男・光男の三人の子がおり、男子は戦後に農具製作を継ぎ、それぞれ別に店を構えた。光男氏は昭和2年11月30日に生まれ、平成27年1月に87歳で亡くなった。光男氏が話者千登里氏の夫である。光男氏は昭和17年、満州奉天の電通に勤めていたが、終戦の一週間前に赤紙が届きソ連に出兵した。そして遅れること昭和22年に戦地から帰郷した。帰国後、電通に復職できなかつたため、岩下農具製作所を継いだ。岩下式製織機を出したのは、八坂・北杵築・東・奈狩江などの杵築市内や安岐・武蔵などの国東市、日出・真那井などの日出町であった。府内に出荷したことはなかった。一度だけ千葉県から注文があったことがある。製織機の注文は修理に行った先や納品した時に新たに注文が入るといった感じであった。

製織機の部品となる鋳物は熊本県にある三枝商事や大分市の鋳物屋に発注していた。部品の購入は千登里氏の仕事でよく大分まで部品を買いに行った。また織機を朱色に塗るのも仕事の一つであった。当時の製織機の値段は5万円ほどで、修理が6千円ほどだった。

昭和30年から昭和45年の間に半自動式の製織機が入り、普及し始めた。半自動式織機は県外からの業者によるもので丸鈴式や佐藤式と呼ばれるものがあった。半自動式は非常に重く、4人がかりでなければ運べなかつたため、千登里氏が手伝えることは少なかった。

昭和35年1月、八坂善一郎市長によって杵築市柑橘振興五か年計画が公表され、みかん

栽培を農家に奨励したことにより、七島藺の生産は急激に落ち落ち込んだ。昭和45年にはムシロバタを織る人がいなくなったことに合わせて、福太郎氏が昭和44年に亡くなったため、製織機を製作することやめた。その後も織機には欠かせないイサシやオサは作り続けていた。足踏み式の岩下式製織機は現在きつき城下町資料館に一基寄贈され、当時を振り返ることのできる資料として常設展に展示されている。(細井)